

越後西川町の地域文化財とコミュニティ

岡村 浩 織田島 利門

一、文人展の開催

筆者は新潟県下地域文芸における近世以降書画を注視し、一般の方々と「越佐文人研究会」を組織して定期的活動を重ねている。調査後の資料公開を目的とする企画展と、記録とを中心とする。居住地の新潟市西蒲区（旧西川町）においても、

○「西川町文化協会設立20周年記念 西川町を中心とする西蒲原郡ゆかりの文人展」(H14・10 西川町福祉会館)

○「西蒲・曾根郷を中心とする先人展」(H23・10 新潟市西川図書館)

○「西蒲・曾根郷ゆかりの文人展」(H26・10 新潟市西川図書館)

○「西蒲・曾根郷ゆかりの文人展」(H29・10 新潟市西川図書館)

と四回の企画を地元の方々と立案・開催してきた。

そもそも当地における第一回展企画の趣旨は如何なるものだったか。西川町文化協会を柱に実行委員会を組織し、趣旨書作成・全体の企画内容・資料収集・図録作業に当たったのだが、当時作成の「趣旨」をそのまま引用し、事業を想起してみたい。

私たちは毎日の生活を送りながら、これまでの歴史の流れの中で輩出してきた地域の文人たちの影響と恩恵を陰に陽に享受してきました。

しかしながら一九六〇（昭和三十五）年から七十年代の高度成長期を境にして急激な生活様式の変化が生じ、それは経済面のみならず文化面にお

いても顕著な変貌を生じさせました。先人たちの文化継承について、断絶を危惧させるような情況に直面しているといえます。

一九五五（昭和三十）年に曾根町・鎧郷村の合併で誕生したニシガワ町、一九六一（昭和三十六）年に升潟村を合併してニシカワ町となったこの地域も、大きな変貌の渦中にあることは言うまでもありません。

この度、西川町文化協会設立二十周年に当たり、地域の先人たちのこれまでの営みに視点を注ぎ、輩出した文人たちの作品・資料を一堂に集めて展示公開し、併せてそれらを中心にした図録を作成し、後世に継承する文化的な財産とすべく、企画展を立案しました。

西川町にとっては、恐らく最初で最後となるであろう本企画を通じて、単に当町出身・在住の人物のみならず、広く活動・交流のあった西蒲原郡内をはじめ近郷の文人たちも視野に入れての展示とし、地域文化継承と今後の更なる発展の一助となればという願いを込めての記念事業であります。

筆者がこの地に移住したのは平成六年のことで、西蒲原郡西川町という町名表示だった。西川町が何回か付近集落との合併を重ね、町制を施行した経緯は、余程特殊な事情や必要性のない限り振り返られることはない。例として西川町を「にしがわまち」と呼んだ時代があったことなど、今知る人は大変少ないだろう。

平成十四年(二〇〇二)、西川町において新潟市との合併に向けての住民意向調査が行われ、賛成五六・五三パーセント、反対二六・五一パーセントであった。この結果を受けて合併促進要望書を新潟市へ提出、諸々協議会に出席、平成十七年(二〇〇五)三月三十一日新潟市と白根市・豊栄市・小須戸町・横越町・亀田町・岩室村・西川町・味方村・湯東村・月潟村・中之口村の十一市町村が新潟市と広域合併をし、平成十九年四月一日、新潟市は北・東・中央・江南・秋葉・南・西・西蒲の行政区から成る本州日本海側初の政令指定都市が誕生した。

政令指定都市を目指す新潟市成立のため、平成の大合併の政策に賛同する流れの中で、一町の歴史など顧慮される機会は何れに等しくなる。そのような地域の見落としに陥ることを危惧し、現時点で町を構成する各地の歴史的話題を記録し、まとめておこうと企てたのが平成十四年の第一回であった。

文人の呼称の定義は一律でない。職業柄の人物もいれば、余技の人物も含む。一般的『市町村史』編集上、当然公共的政策やくらしの歩みが重視され、個人の記述は薄くなる。とくに芸術文化活動に関する記述は甚だ乏しい。本企画では軽視されがちな芸術・文芸家を主人公として、その足跡を通して現代社会の成り立ちと特性を浮彫りにすることと、今後の指針の一端に捉えることを目的に、資料蒐集と公開をはかったのである。

二、町史に代わるもの

これまでの文人展開催を一つの財産として、新たに平成二十九年度より『西川郷土史考』編集発刊に向けた取り組みが進行した。計画書に綴った文面から、具体的内容に言及する。

〈編集着手の動機〉

新たな市政運営の元、市民活動のあり方も様相を変える。単独の行政区域ではなくなつたことで、地域間への埋没を危惧する声も各方面に唱えられた。町内唯一の曾根商店街では古刹・明誓寺の開基に起因する二・七の市のにぎわい、商店街のみならず町全体の参加が感じられた西川まつり等、

目にみえて衰退の一途を辿る風俗・年中行事があるのは寂しい。かつて活性化のために誘致した県立西川竹園高等学校も募集停止となる。

上記の諸問題に取り組む一つの方策として、過去文人展を開催した主催団体は新たに西蒲・曾根郷ゆかりの文人研究会(会長・織田島利門)を組織し、

○高校の跡地利用による「傘ばこ」を中心とする資料館の開設。

○『西川郷土史』の編集発行。

の二点実現に向けて協議を重ねてきた。

結果、新潟市文化振興課・西蒲支所・西川地域コミュニティ協議会への協力打診を経て、コミ協の活動計画に組み込む形で『西川郷土史』編集発行を平成二十九・三十・三十一年度の三年がかりで着手する運びにいった。主管は西蒲・曾根郷ゆかりの文人研究会である。

平成二十八年三月、最初に西蒲区長に提出した要望書の冒頭には、「地域の歴史的文化遺産に住民が触れる活動は、愛郷心を涵養する一翼を担うものであり、また西蒲区全体のビジョンにうたわれる〈歴史と文化を守り伝える続けるまちづくり〉を具現化するものと考えます。私たちは住民が地域の歴史的文化遺産に触れ、親しめるようにすると共に、地域を活性化する観点から次の事項を要望します。」とうたった。続いて刊行物の内容を項目を立てて、計画書では次のように説明した。

〈本書の性格〉

江戸期には代官所が置かれた、特色ある歴史を持つ西川地域だが、残念ながらこれまでいわゆる『市町村史』の類の刊行物はまとめられていない。

幸い西川地域のこれに代わる文献としては特筆すべきものに、昭和四十五年から平成十八年まで発行された『西川町史考』(全三十五冊)がある。史的見どころを点描した貴重な記述を読める。

そこで、この叢書を基礎資料に用い、加えて現代までの通史としての流れを包括した、本書『西川郷土史』(仮称)の刊行を目指すものである。

執筆方針としては、一般にわかりやすく親しみやすい記述に努め、地元及び周辺のくらしに活用がはかれる内容を期す。

〈具体的内容〉

人々のいとなみの中で、土地に愛着を抱き、ふるさとを大切にする気持ちを育むのは当然のことながら、日頃の慌しい生活にあって足元が余りにもおざなりにされている現実がある。伝統行事や文化活動は忘却の運命に向かう一方だが、全く姿を消すことは、二度と入手できない財産・宝物を失うに等しい。

以上の観点から、

○今始めなければ二度と書き残すことが出来ない内容を後世に記し伝える。伝承の煙滅を避け、書き手の健全なうちに事業としてまとめる。

○『西川町史考』（全三十五冊）、三度企画開催された「西川ゆかりの文人書画展」の実績を踏まえ、資料性に富んだ内容とする。

○一般への普及にふさわしい、公共的かつ平易な記述を目指す。
を編集方針として掲げる。

〈現時点での構想〉

・内容

通史（古代～現代）・産業・民俗（祭り・傘ばこなど）・代官所・地域の人々のくらしなど

・執筆・編集者

本会文人研究会会員と地域の歴史愛好者

・執筆・編集の期間

平成二十八年度を初年度として四、五年間を見込む

・冊子の装丁

通史として一巻・約二五〇頁 資料編として一巻・約百頁（カラー頁を含む）A4版

・配布先発行部数

西川地域の小・中学校各20部 西蒲区内を中心とする図書館各2部
コミュニティ協議会各1部 資料館各1部等 計約100部

冊子を要望する人には実費で頒布

〈目次（案）〉

通史編

古代から現代までの町の歩み。今日までの歴史の概説。

通史・現代まで。

〈項目別〉

土地の商・産業

交通

伝承

民俗・風俗

代官所

観光・自然

教育

寺社仏閣

文化財

石造物・石碑・墓誌銘

町の整備・近代化

人物

こぼれ話 身近な話

座談会・地域を語る

参考文献・資料一覧

資料編

通史編

通史編に基き写真や図表を掲示する。文化財・当地ゆかりの書画資料の紹介。

最終的には、西川地域コミュニティ協議会との検討会を経て、一年先送りにした形で平成二十九年度からの三年継続事業として取り組むこととなった。編集も一冊にまとめる予定に変更。

続いて通史編執筆一年目分を終了した時点で、岡村の担当箇所に関連する内容を数項目分、改めて本稿にまとめてみる。

三、治水

越後平野の中央に位置する西蒲原の平野。東部は信濃川とその支流中ノ口川、西部は弥彦・角田山脈麓の砂丘、南部は大河津分水路に囲まれた低平地帯である。

かつて無数の潟や沼が点在し、一雨でたちまちあたりは湖と化す排水不良地、悪水との闘いが農業史の裏側にある。

○新川開削

○大河津分水

○西川制水閘門

などの悪水排水手段は、近代土地改良の第一歩であった。

その後、上郷・新川・西川西部・広通江など地域ごとに水利組合が組織され、昭和二十六年三月、西蒲原土地改良区設立の礎になった。戦後の食料確保のため、農業基盤整備が急務だったのである。

昭和四十二年から三年間、全国的に大豊作となる。やがて五十年代から本格化する生産調整という、農業の冬の時代の幕開けでもあった。

昭和三十三年国営鎔潟干拓事業着工、昭和四十一年に鎔潟の干拓が終了したことは、地域農地整理を代表する逸事といえる。

昭和五十三年、六・二六水害がおこり、西蒲はほぼ全域が水没。これを受けて、地域から広域排水事業一色の時代に進む。

のち平成十四年十一月、悲願といえる大通川放水路が通水、二年後の集中豪雨と台風の災害もこれによって大事にはいならなかった。

以上『西蒲原土地改良区報創刊百号記念 区報で振り返る西蒲原土地改良区のあゆみ』（西蒲原土地改良区 H18刊）の記述に基づき、治水事業が当地の生命線の一翼を担ってきた歴史の一端を概説した。筆者が資料的に興味をもついしぶみ（石文・碑文）からも、同様の史実が読み取れる。

その一例として、矢島神明宮境内に「治水記念碑」が建つ。碑面には中央に題字五文字。その右には明治二十九年七月洪水が起き、県から補助金を得て潟前の堤防を築いたことと、同三十七年負債の上、排水機を設置したこと、のち官立水利組合を作り、ようやく治水問題が解決した旨を四行

で記す。下段には事業代表者として十二名の氏名を列記、左最終行に明治三十九年十一月建、田中勇吉謹書、石工鈴木豊治の名を刻む。

碑面にある治水事業が大難題だったことを、『矢島今昔』（中沢吉二著・S50刊）所収「治水事業碑によせて」の一文が詳しく記述している。まず二十九年の洪水とは有名な横田切れのことで、鎔潟端部に当たる当地の江戸延宝年間（一六七三～一六八一）から一畝毎に力仕事で築き上げてきた堤防も、大被害を受けた。碑文通り県の補助を得るまでには他村と共に請願したものが受理されず再度提出、ようやく念願叶う。土運びの「かごべい」の日当は十銭、一日に七里を歩くことが条件だったという。米一升十銭の時代のこと。

それで収まらず、全体に耕地の地面を高めたことにより隣村の押付と訴訟沙汰になり、長期裁判費用がかさむなど碑文が簡述する背景は深い。中沢氏の文は「矢島排水機がほんとうに要らなくなったのは、農林省の鎔潟排水機場が運転を始めた昭和三十六年である。」で締めくくっている。

続いて治水に関わる特筆すべき事項として、内野新川排水路（三潟悪水抜掘割）普請願人・曾根村割元中野清左衛門に触れる。文人研究会員・小林多門氏の上記表題文（『新潟県文人研究』19号所収）に詳しいが、まず冒頭を引用させて頂く。

「内野新川は、文政三年（一八二〇）に通水した人口の大排水路である。大潟から五十嵐浜まで手作業で掘削した延長約四・五キロメートル、川幅約十八メートル、高山地点の西川交差点は西川に底樋二門を伏せ、海岸近くの高さ約十六メートルの金蔵坂の掘削など難工事を長岡藩曾根組、巻組三十七ヶ村・村上藩燕組、茨曾根組、味方組十五ヶ村の村人総動員で、着工から二年足らずで通水にこぎつけた。完成するまでの計画者、割元、庄屋たちの辛苦、またその後の苦難は想像に尽くしがたい遍歴となった。」

新潟の実業家として知られる中野家の出自は、今の新潟市西区横尾である。この家の本家に当るのが曾根村割元だった中野家で、小林氏は曾根の子孫に取材して一文をまとめられた。筆者の方は、横尾中野家について文

人研究の視点からの珍しい資料を見出したので、ここに紹介したい。それは江戸後期、中野家に身を寄せ当地で学塾を開いた福永恕堂の事績である。まず恕堂のことは、良寛研究家・渡辺秀英氏旧蔵恕堂詩書軸の表具裏面に付記した渡辺氏墨書を読んで初めて知った。

「恕堂、名は寛、字は巖恭、福永氏日向高鍋の人、東條一堂に学ぶ、妻錦岫女史と共に横尾中野家にて子弟に教授す、のち江戸に出て嘉永四年五月歿 四十八歳 秀英識」

中野家に関わる文人では、會津八一や笠原勲等、新潟中学校同窓生がよく知られる。江戸以来の文士の受け皿・後援者に各地の地主素封家が多いことは既述したが、中野家もまたその一人であった。恕堂はさかのぼって古い来越文人に当る。僥倖にも、恕堂詩書軸と同じ来歴の掛軸群に、恕堂の経歴を墨書した一本が含まれていた。長文になるが他書にみない記録のため、全文を掲出することにした。

恕堂殉難事竣矣 其妻錦岫来泣曰 亡夫嘗語云 立德立功立言斯三者先哲所難 吾豈敢然如立言則有六経存焉脩辭以述経旨縱不能比肩先哲寧無一言可立邪 汝幸好文書其能助我以省吾膳写検閲之勞 妾以為九齡之鳥 且草玄妾雖無似密勿就之未必讓童鳥也 由是箕帚之暇兒童句読経籍抄元 妾可企及者未嘗不竭身也 累年之久其所述作蔚乎 滿篋行将問之也 何図志未就一朝先難露 妾哀裂胸而女子之力未若之何適自越寄書来曰 弟子等在千里引不堪哀慕 願立一碑於横尾 展墮涙之誠子其需銘於瑤池子乃書之以慰 吾儕子弟之心妾謹請先生賜一言 不朽泉下無涯之憾焉 噫予於恕堂非它可比且憫 其不幸宿志不遂是固可銘而越人之懇亦不可空默 乃叙之曰 恕堂名寛 字巖恭 族福永氏 恕堂其号 日向高鍋人 幼来江戸学於予塾 学究古義作文説経爬抉詮釈必得正当 而後止日 遊覽奥越之間 越之横尾里正中野氏 五十嵐伊藤氏 強留之而教授子弟 為造塾貯田礼待特厚 於是遠近来学者日加 名高於越 而恕堂初志出於一時濟勝不欲久留焉 遂去 帰江戸居玉池 某侯聞其名欲聘致之教矣 辭不仕 蓋内有大所持焉者耳 惜乎俄罹疾而歿 実嘉永四年辛亥五月十六也 享年四十八 葬於市谷月桂寺 恕堂平日於交遊之間 其所為必出於忠信而和易 不敢先人之歛心 是

以其所友所識者 嘆吁其死殊甚 予謂恕堂忠信和易為人所哀惜若是之甚也 則志雖不遂其所志者 必当著於世 不至湮滅 是独可安也哉 斯波氏 名雍 号錦岫 無子 在越時養中野氏季子為子 先亡 銘曰 骨肉歸土 月桂之墳 無不之者 夫唯魂乎 泉某復焉 以彫良珉 致認則著 致愛則存 松之風邪 岑之雲邪 其優然者 越之其人 必知之於懷愴之心如日 嘉永五年壬子秋八月 一堂東條弘撰文 甲寅秋九月 斯波氏雍拜書

文のあらましが、日向高鍋生まれの福永恕堂は、幼くして江戸に出て鵬斎門の東條一堂の塾で学んだ。のち東北越後を遊歴する旅に出たところ、横尾の中野・五十嵐の伊藤氏に引きとめられ、そこで開塾することとなった。評判となり遠近問わず入学者は増え、恕堂の名も高まった。しかし初志を忘れることなく再び江戸に出て、神田お玉ヶ池周辺に住むこととなる。以降、召し抱えようと呼ぶ者があっても仕官することはしなかった。嘉永四年（一八五一）五月十六日、四十八歳でにわか病死、市ヶ谷の月桂寺に葬られる。體肉は土に帰り、滅びないのは唯魂のみ。志を遂げられずとも、その志は煙滅することなく、とくに越人の間に忘れられることはないだろう。そのためにもゆかりの地横尾に、一碑の建立を求めたのだった。

建立のための碑文を書いたものが、本軸であった。撰文は師 東條一堂、書は妻の斯波氏による。子はなく、中野家の末の子を養子としたが、恕堂よりも先に亡くなったという。果してこれと同文が建碑されたのか、確認し得ない。『北越詩話』にも名をみない福永恕堂を窺う唯一の資料であり、夫人の書は王羲之の書跡を集字したかの如き古典に基く書きぶりといえる。以上治水事業者と、そこに身を寄せた文人との関わり的一端を紹介した。

既往図書では『新潟市史 資料編4 近世Ⅲ』（H5刊）に、五十嵐浜村の庄屋・若杉豊太郎の江戸学問修行時日記中、「恕堂福永巨作」のところに身を寄せていたことを窺う記録がある。

四、注目の人々

同じ矢島神明宮境内に先の治水碑と並び、「日露戦役凱旋記念碑」が建つ。上部に三字ずつ三行、九文字の題字を置き、従軍者十二名の勲等と氏名を列挙、末行に明治三十九年十月の紀年と書者田中の氏名、そして先の碑と同様、石工鈴木豊治の氏名とが刻してある。この件に関しても『矢島今昔』に文があり、十三人の従軍者のうち不幸にも一人戦死者が出た。碑の奥には、ひととき大きい忠霊塔が建つ。ここで大東亜戦争戦死者十九名と併せて祀られている。当時の矢島五十二戸という規模の割に、他村と比べ戦死者が多かったという。

矢島神明宮境内の二碑は後世に不朽にすべく建立されたものだが、その文面と共に書と彫りの双美に気付く人は今日殆どいないであろう。

書者の田中勇吉について記す。

〈田中勇吉（一八五六〜一九三九）〉 曾根生の素封家で、曾根銀行を興した一人。名は正厚、字は子方、通称勇吉。晩年章二郎と改めた。新保西水の有能な弟子で、師に似て優れた書と漢詩を残す。雅号は墨軒。昭和十四年札幌で没す。

その祖は古く源頼義までさかのぼって、源氏に従い黒鳥兵衛の乱を平定した。のちに旗屋に土着し、代々庄屋を務め、それが一六〇〇年代頃矢島に移ったとされる。

近代の系譜は田中伊八（号墨池軒）、勇八そして勇吉（号墨軒）と続く。伊八の代まで酒造業を盛業したが、株と家屋を売って曾根に移る。その矢島の屋敷跡に佐渡山村（現燕市）の大庄屋・加藤家を再興させ、現在加藤家ご子孫が居住される。

曾根に移った田中家の北海道転居後は、曾根三番町・村田屋酒店が酒販をなりわいとして続けている。

この田中家に言及する中で、加藤・村田屋の名を出したが、両家ともに書画資料の点から特筆すべきものがある。

加藤家からは狂涛と号す文人画家が出た。また村田屋所蔵品には為書のある幕末三舟の一人・高橋泥舟書額「酒徳馨」と記す、酒造業にふさわしい作が伝わっている。孔子廟堂碑風の楷書五言律詩軸にも、「為小林雅契需」と店主宛の為書一筆を付記する。店の向かいの旧家・大瀧氏の許にも同じ

く為書の泥舟書が残っていたことから、旅先で困窮した泥舟を曾根人が大切にしたという逸話の裏付けになる。

田中の書を分析してみる。線の送筆部・中央が盛り上り膨らんでみえ、収筆部分は鋭く引き抜かれている。一見して中国晩唐から宋代に活躍した書人・柳公権の書風にならった趣が強い。厚みと暢達さ、端正な字形は相当の手練れであったことを思わせる。運筆の動感を巧みに再現した刻者は、巻町布目の石工・鈴木豊治である。

田中の書碑を鑑賞教材に用いれば、地域の歴史の身近な学習と一緒に、書写の手本にもなる。

この視点で田中の師・新保正興（号・西水）の整理の行き届いた書美に關して、小学生向けの解説作文をまとめてみる。

地元の書画を大切にしましょう

わたしたちの住んでいる町には、他にじまんできる偉人をたくさん出しています。

昔のことは毎日のくらしにあまり関係なく、ふり返るきっかけがなければほとんど月日がすぎてしまいます。

いそがしい毎日、少し立ちどまって先人（昔の人）の生き方や足取りをみつめ直すことを提案するために、たとえば今回は書と絵、漢詩和歌といった日本の伝統文化を専門によくした人を取り上げることにしました。

〈新保正興・一八三二〜一八九三〉 しんばまさとも。「興」は「与」の旧字（古い漢字）です。曾根の町内に生まれ、今も生家跡は書店としてのこっています。

峰岡と曾根小学校の「校祖」として大切にされてきました。この二つの学校は、新保氏の寺子屋を元に発展したものです。学問の神様として新潟の菅原道真のような存在といってもよいでしょう。

今日、「曾根天満宮校祖会」が新保氏の学者、教育者としての功績ののちに伝えようと顕彰を続けています。六月中、記念に花火をあげ習字をたくさんかぎります。

その経歴はさまざまな本にのっていますが、この展覧会ではその書いたひっせきに注目し、まじめな人柄、学者らしいすきのない一点一画もみだれない書のみりよくを味わってほしいと思います。

曾根神社には新保氏の書いた碑文が建っています。

手書きの機会は少なくなる一方ですが、だれもが書くなら上手に書きたいと思っているはずです。

うまく書くコツを教えましょう。

①たて線はまっすぐ引く。

②よこ線は少し右上りに引く。

③かたちは正方形か、たて長に。つぶれた字はいけません。

④はね、とめなど線のおわりのところにメリハリをつける。

これを守れば新保氏のような整った字が書けるようになります。

たて書、よこ書、どんな大きさにも通用しますので頭のすみにおぼえておくとういでしょう。

以上は第二回文人展の際に作成したパンフレットから引用したものが、『西川郷土史』編集事業の一環として、小・中学生への出前講義も計画している。多くの世代に対する愛郷心の昂揚につながることをねらいとしたものである。

五、来越文人

前掲矢島神明宮よりやや離れたところ、国道一一六号線から升潟地区に向かう道を入つてすぐに「上組の地蔵尊」（旧西川町大字升潟）が安置される。入口左側に「六百遠忌 南無妙法蓮華経」、笹の群れに覆われ目立たないが、その奥に大きな「明治三十七八年 戦役凱旋記念碑」が建つ。碑額の署名押印から筆者は西川春洞と判明する。

〈西川春洞（一八四七―一九一五） 名は元讓。江戸日本橋生。はじめ越後長岡生の中沢雪城に書を学び、のち中国金石文字や清人・徐三庚等当時いち早く彼の地の古典や先人書法の摂取に努めた。明治を代表する書家の

一人だが、同期の他の大家が県下に来越の足跡を多く残すのに比べ、春洞の遺事を拾うのは難しい。管見では柏崎石匠・小林群鳳に贈った書額「群鳳堂」があり、当然書碑が本県にもあるはずだとかねて思っていた。

本碑は、題字から軍役に従った二十三人の勲等氏名全てを行書でしたためている。明治三十七、八年の日露戦争からの生還帰郷記念として同四十年に「大字升潟」集落が建てた。この頃の碑文は大抵楷書での揮毫が常であった中、江戸の和様書を用いた春洞のくづし字が刻まれている。著名な書き手によることと、先の矢島の碑にもあった通り、国家の近代化の陰で富国強兵の号令下、地方がまき込まれてゆく一コマを確かに伝え残す。碑面に刻入してある人々の子孫が現在各字に住んでおられるか、地元の方々によって調査することも、明治から平成の終わりにいたる百二十年余りの身近な民衆史を理解する術になろう。

続けて句碑を一基特筆する。こちらも他地域の俳諧師・山口嵐更句書を刻む巨碑で矢島に建つ。かつてここには大櫓があった。手の施しようがない西川の大洪水に遭った際、通りがかりの女性が人身御供となつて水神を鎮めたという。その名を付けた「お仙地藏」を櫓の下に安置、今も供養されている。矢島切れ、また善光寺堤の洪水の史実と民間信仰とが相まって、このような災害を風化させない教訓としてのモニュメントが作られたのだろう。

句碑に言及するにも上記のような伝承・史跡を併せて語れる程、土地固有の文化密度が高い。お仙地藏のうしろにあった大櫓跡地に、山口嵐更の句碑は建つ。

咲く花のたしかさ見せて 朝あらし 嵐更

と刻む。各地の詩歌句碑を調査している経験上、縦二九三横九六センチメートルに及ぶ比類なき大きさなのである。碑陰には建立の趣旨と募金者の居住地・氏名を列記。それによれば矢島的小林忠平（号・香月堂鶯宿）が中心となつて、大正十五年春に建った。鶯宿が来町した蕉風十一世・山口嵐更から免許皆伝の証として立机を授与されたことの記念に企画したもので、驚くのは遠く朝鮮の地まで協力者を募っている点である。一方地元近

郷にも同好の士がいたことの証明にもなる、裏面の協力者人名録を刻む。

先の泥舟と並び、この嵐更等を来遊文人・所謂「文人墨客」と称す。流行の文化を地方にもたらした担い手で、ことに幕末から明治期、俳諧が各地で普及した痕跡がある。例として押付神明宮の献額に、地元の人達が詠じた墨書奉納句が風雪に薄くなりつつも、見出せる。殆どその全てが追究不可能な俳号の人物達だが、併記されている地名をみるだけでも、かつて一般農民の間に親しまれた文学、引いては文字教養自体が、俳諧から始まったことを充分偲ぶことが出来る。

関連事項としてこれまで隣町において「赤塚郷ゆかりの文人展」を二回企画し、同様の趣味性に気付いたのだが、背景として先述の嵐更と同系美濃派俳人だった魯松庵や曙庵が通った北国街道の道筋に当ることが挙げられる。『西川町史考 その22』(H6刊)に、西川町に伝わった魯松庵筆「俳家百人図屏風」への考察が載る。

もう一人、従来西川の人々に知られない画家・笠原軻に言及したい。

《笠原軻(一八八五―一九五五)》相川の地役人・渡辺娶の子。父は詩人として『北越詩話』に伝記が載る。新潟中学校卒業、東京美術学校西洋画科卒。水原町の旧家で県議、文人的素養をもつ笠原氏の婿養子となり、東京に住む。白日会会員、大正十四年第六回帝展に入選。しかし関東大震災と妻の急死ののち、人生は一変。自己生活能力が乏しい中、県下知己を頼り、身を寄せるくらしとなる。

昭和二十二年知人の竹村氏を頼り津川へ移住、同二十八年から津川高校の美術講師をつとめた。この地に赴くきっかけに、早くには昭和五年郷土民俗学実地調査に参加していたことがある。

昭和三十年十一月四日、新潟市沼垂で孤独な生涯を閉じる。享年七十。戦後位までの画家は、書もよい。私は何人もそういった画家の書画一致の表現にひかれて、調査の対象としてきた。

軻を初めて身近に思ったのは、「亀田郷ゆかりの文人展」(H17)だった。俳人と地元画家、来遊文人の受け皿となった農家の動向を主たるテーマとしたもので、中でも民俗学者で奇人文人の小林存が、出色の存在として注目を集めた。この存と軻とが交流厚く、二人揃って大農家・百和堂主・

片桐民治の気やすく居心地のよい炉辺に姿を現していた。しばしば軻は存の主宰する民俗学誌『高志路』に、文を寄稿している。

続いて「阿賀野市ゆかりの文人展Ⅲ」(H23・25)で取り上げた。ここには比較的珍しく、軻の洋画が残っている。洋画をまとめるための画材の入手は、大変だったのだろう。多くは水彩着色画で、素材は津川の風景と中国訪問写生だった。

以上、土地との縁をもったくさんの作品をみてきた。

晩年はうらぶれた寂しい生活が続いただろう。それでも生きた証を各所に残し、別の人物を追っているうちに軻に触れることも多く、話題は広がる。西川町曾根との接点もあったのだった。平成二十九年に「西蒲・曾根郷ゆかりの文人展」を開催するに当たっても、多くの軻の画作を展示し、興味のある方々に驚かれた。曾根の書店と割烹に友人がいたため、たまにこの地にも滞在していたのだった。後援する意味で、作品頒布がされたのだろう。画題は地元風景ではなく、津川の光景が多い。スケッチに基き当地を思い出して筆を走らせたのだろう。同じ内容の作が多い。一例として「屠龍山人笠原軻画集」(顕彰会・H4刊)所収「略年譜」によると、「昭和二年・六五歳 八月曾根、松ヶ崎に遊ぶ」「二十九年・六九歳 一二月曾根より沼垂に戻り越年」とある。

また軻顕彰会機関誌『屠龍』の小林智明氏連載記事「百和堂主人への屠龍山人の葉書」に、度々「曾根」の地名がみえる。

「又々当地滞留。二三日内に丸山へゆき約束のものの描き上げ、年内に中川医師への旧約も果たしたし。全く飲みしろとかせぎに大わらわなり。先日厚情多謝、又々御世話になります。皆様よろしく 廿日朝 笠原軻」(S29・11・20付)

「昨年中の御厚情深謝、何卒本年も宜敷御願申上ます。旧臘曾根より沼垂に立返り遂に越年。尚十三日迄滞留に付、兼て丸山牧舎へ富士の画描き上げにゆきます。お餅は元旦に食べただけ故、明後早朝戴きにゆきます。皆様によろしく 沼垂公民館にて 笠原軻」(S30・1・5付)

二通の書簡の背景を読みほぐす材料として、小林氏は曾根の書店主・朝妻鐵男宛の軻葉書を併せて紹介している。そこにも、

①「先月半ばより西山日光寺滞宿。昨日帰港し御手紙拝誦、昨夕出港、当分在港。只今スタンブ図案執筆中、明日御届けに御伺い可致、折角御期待の間に合えばいいが、皆々様によりしく 三日朝 沼垂公民館気付 笠原軼」(S29・12・3付)

②「客年は大変に御厄介に相成御厚情深謝。別後遂に沼垂にて迎春。尚、来十三日迄淹留、少々飲み過ぎにて静養中。向寒皆様御自愛切禱 三日夜 沼垂公民館 笠原軼」(S30・1・3付)

③「久しく御無沙汰皆様愈々御清栄賀し上ます。只今帰山途上新津駅にて、明後帰港し又々表記に滞在します。新春以来づつと沼垂滞留、一と月ばかり少々体の具合あしく、制作中絶の処漸く恢復。本年こそ兼々お約束の油絵静物執筆可致、適当の季節御指命を待つ」(S30・4・20付)

この頃は最晩年に当るが、沼垂公民館を住まいとして、津川とこの曾根に出掛けて厳しい生活を送っていたのだった。

軼の曾根に伝わる作品は、『西川町を中心とする西蒲原郡ゆかりの文人』(H14刊)に多くを収録し、平成二十九年開催の企画展に現物の大半を公開した。制作年を付記したものがなく、作家の手元に保管してあった作を折々頒布周旋したものか。前述のように曾根の町内を写生した画材には遭遇していない。朝妻氏ご子孫に残る軼作の全てを窺っていないものの、手紙文に従えば、注文作が制作された節が読める。全体的な軼作について見方を次に掲げて、作品の保存の必要性を明記したい。

現存作は、水彩による訪中風景と新潟懐旧図、そして津川関係分である。油絵での公募展挑戦は、画壇の体質が性に合わなかったのだろう。残る油絵の大半が津川風景なのは、心おきなく自然体で当地を愛したからに違いない。一方水彩は、中国を描きつつ新潟風景と同質。モチーフによる作風の変化はみられない。これといって特色に欠けるように映るが、強みはゆかりの土地を描いていることを画賛に物語っている点である。同時代の多くが技巧に走る中、明治から昭和の間に名家が没落したのと軌を一にして、失われてゆく県下の風景を詩情豊かに写生、制作し続けたことに、彼の真骨頂がある。

油絵と水彩の双方を残す作家は県人でも他にいるが、これ程画讀を付す

形式はみない。水彩は一見弱いかもしれないが、詩書があるから絵で余計には描き切っていない。

六、教育者の系譜

改めて新保氏を含み、西川町の輩出した教育者を掲出する。

〈新保正興(一八三二〜一八九三)〉 曾根村朝妻永伯の子として出生、名は清次といい明治になって正興と改めた。天保九年(または十年) 曾根村小澤精庵の塾に入り、次いで嘉永二年(一八四九) 江戸の大槻磐溪の塾に入る。安政元年(一八五四) 十月曾根村に帰り、翌年新保氏を継ぎ、磐根の妹「てい」と結婚した。新保塾の教え子は安政六年の一四一名が最も多い。明治三年(一八七〇) 四月峰岡藩主牧野忠恭の招きをうけ、藩校入徳館の文学一等教授兼侍読となる。後曾根塾に帰り、明治五年の学制により、同六年曾根村加藤宇平次宅を借りて曾根小学校を開学、同十年に現在地へ移転した。明治十四年新潟師範学校助教諭、同十六年教諭となる。明治二十六年五月師範学校中学校高等女学校国語科教員免許所を得、同年十月十九日在職中に死去した。享年六十二。

〈新保磐次(一八五六〜一九八五)〉 西水の長子磐次(言わじ)は寡言で病弱ながら父の学統をよく受け継ぎ、函館師範学校や東京高等師範学校その他の各地の教諭を務めた。国定教科書編纂改訂、『日本読本』『趣味の日本史』等著述が多い。一村とも号した。東京にて昭和七年七十七歳で没す。

〈新保寅次(一八七四〜一九五五)〉 磐次・四郎次・秀太郎の次の男子(四男)だが二・三兄は夭折。寅次(取らじ)は廉直高峰の人。東京帝国大学国文科卒後、明治三十五年を皮切りに高田中学・福岡伝習館・宇都宮中学校・鹿児島県立第二中学校長、大正八年には旧制山口高等学校初代校長、のち松本・広島高等学校長。昭和三十年八十一歳で病没。桑山慶應寺にある「新保家之墓」は寅次の書による。

〈小澤精庵（一七九六～一八六三）〉 小田原藩士族の出身で、名は斑美、犀守、友恵（徳）、通称新兵衛。精庵と号した。堂号を困学堂という。他に兼帯老人とも称した。文久三年（一八六三）七月二十七日に六十七歳で没した。浅草の榎寺（浄土宗増上寺の末寺正覚寺）に葬られた。少年の時諸国を遊歴し、下野烏山藩（栃木県）の大久保忠成のもとにいたが、忠成の致仕にともない蒲原郡の諸村に住む。本町村（もとまちむら、現吉田町）を経て天保八年（一八三七）に曾根村に住み、二十一年間にわたり見帯の困学堂という家塾で教育にあたった。一般には儒学者とみられているが、講義録や著作をみると博識で多彩なものであった。開国が攘夷の当時、同じ時期に共通の思想的基盤の新潟奉行根岸九郎兵衛、出雲崎代官篠本彦次郎と親交を結んだ。安政四年（一八五七）に持論の海防論を幕府に献策のため出府するが、いれられず江戸で不遇のうちに没した。

この小澤精庵の事歴について、大字下山生まれで長く教職にあった笠井三七二のことを絡ませて紹介する。笠井氏は地元ゆかりの書画の散逸を避け、早くから蒐集に努められた。没後平成元年巻町郷土資料館にコレクションの中核を寄贈、同館では巻町郷土資料館目録12『笠井氏旧蔵 小澤精庵遺墨遺稿集』を作成した。その文末頁に載る、田中墨軒撰文と思われる「小澤精庵像ならびに略伝」を引用させて頂く。

先生初名ハ斑美、晩ニ犀守ト改ム、通称新兵衛、精庵ハ其号ナリ、旧小田原藩士、少年ノ時藩ヲ脱シテ諸國ヲ遊歴シ、中ゴロ旧烏山藩主大久保忠成侯ノ幕客タリ、忠成卒シテ越後ノ各地ニ遊寓シ、晩年西蒲原郡曾根町字見帯ニ困学塾ヲ開キ専ラ教授ヲ事トス、天保ノ末清國阿片ノ変ヲ聞キ深ク辺防ヲ以テ憂トナシ、百方西洋ノ事情ヲ考案セント欲シ、翻訳書アルヲ聞ケバ必ズ之ヲ購求シ、又采覧異言職方外記等ノ諸書ヲトリテ訓譯ヲ施シ、以テ生徒ニ授クル等世ノ所謂儒流ト選ヲ異ニセリ、安政四年米使ペルリ幕府ニ逼リテ請フ所アリ、先生自ラ幕下ニ至リテ上書シ、及ビ諸有司ニ開説スル所アリ、皆用キラレズ、性素ト峭勵（しょうれい） 苟合（こうごう） ヲ求メズ、終ニ沈淪シテ逝ク、時二元治元年七月二十七日、享年六十有七、先生博学多識ニシテ著書鈔カラズ、又砲術ノ技ニモ精シカリキトイフ、上

野黙狂君曾テ先生ノ評傳越佐時論ニ掲ゲ、ソノ結論ニ於テ北越ノ象山ト禮讃シタルコトアリ、坂口五峰君モ亦北越詩話ニ、「顧フニ當時儒生ニシテ洋事ヲ探リ、併セテ砲術ニ及ブ、精庵アルノミ、若シ精庵ヲシテ雄藩ニ仕ヘ大都ニ居リ天下ノ賢オト交ラシメバ未ダ必ズシモ象山ト聯盟駢駆セズンバアラズ、而シテ彼ハ獨リ大名ヲ享ケ、此レハ則チ閑然（げきぜん） 閑ユルナシ、豈重ネテ悲マザルベケンヤ、精庵著述甚ダ乏シカラズ、予嘗テ其日本外史喚醉（かんすい） ヲ見、頼山陽日本外史ノ誤謬ヲ辨ジ鑿々緊ニ中ル、殊ニ其學ト識トヲ見ル」云云、ト推賞セリ、嗚呼先生越ニ在ルコト約三十年、國ヲ殉フ志終ニ之ヲ伸ブルコトヲ得ズシテ歿ス、然モ曾根郷ノ文學、先生ニ負フ所多ク、其予徳今ニ絶エズ、門人ニ西水新保正與翁アリ、鴻儒トシテ譽高シ、

〈山岸德平（一八九三～一九八八）〉 曾根村に父十茂能、母サヨの長男として生まれた。新潟師範学校を経て、東京高等師範、東大に学んだのち、学習院・東京文理大教授・実践女子大学長、他多くの大学で国文と漢文学の指導をした。『山岸德平著作集』全五巻の内容は、①日本漢文学②和歌文学研究③物語随筆文学研究④歴史戦記物語研究⑤説話文学研究から構成され、このタイトルをみただけでもその研究領域の広さがわかる。久曾神昇「山岸先生を憶う」（『汲古』12号所収）に、愛知大学教授だった久曾神氏が長年交流のあった德平に同大学で小説史講義を依頼していたことが綴られている。三通目の葉書の文末はこれに関する記述。また一通目に名前が出てくる「ツル」は德平の末妹。西川公民館所蔵「山岸家文書目録」（『西川町史考』その32所収）がある。旧蔵書を窺うには、『実践女子大学図書館蔵山岸德平文庫目録 日本漢詩文・儒学』（H29）・『実践女子大学図書館蔵山岸德平文庫目録 仏書・儒学補遺』（H30・何れも高橋良政氏を中心とする編集）に詳細を収録している。

まとめてみると新潟市立曾根小学校では正與を「校祖」と仰ぎ、諏訪宮・曾根神社境内には天満宮としてまつられ、毎年六月最終金・土曜日「校祖祭」を挙行、天満宮建物内には正與にあやかるべく、生徒の半紙習字作品

を貼り展示する。

西水の師・小澤精庵は他国から流れきた人物だったが、つきつめてみれば、この人物なくして西川町の教育機関の歴史はないといってもよい。

また正興に山岸氏の父が学んだ。山岸氏の研究は、勤務先だった実践女子大学をはじめ国文関係者による多くがあるが、当町では県立西川竹園高等学校の命名者として長らく名は語り継がれてきた。当町教育本流の歴史上、重要な一部である竹園高等学校の平成二十八年閉校は惜しまれてならない。

七、画家の系譜

前述の項目に登場した人物も含み列記する。

- 〈多賀 春塘（一八〇〇？～一八七九）〉
- 〈多賀 二峰（一八二四？～一八九七）〉
- 〈加藤 狂涛（一八四三？～一九一三）〉
- 〈多賀 春洞（一八四七？～一九一三）〉
- 〈熊倉 光好（一八六二～一九三七）〉
- 〈伝川白童子（一八八八～一九六三）〉
- 〈白倉 嘉入（一八九六～一九七四）〉
- 〈渡辺 更響（一八九七～一九四五）〉

このように少なくとも八人の画名が挙げられるのは、旧西蒲原郡内では珍しい。多賀氏の如く集積地主で町の中央にあった旧家に、数代にわたる趣味家の興る例が、越後一帯の書画文芸を支えた社会層の典範であることを改めて指摘しておく。教育家の条で触れた新保正興、近郷樋曾生まれの画家・本間翠峰の助成をはじめ、来遊文人の受け皿となった家である。

傾向として他五氏をみると、加藤は北海道、白倉は京都、伝川は東京と、多くが西川の地を離れている。明治中期から社会の激変に伴い、美術をとりまく状況も一変した。作り手と享受する側双方の人口増加、学校等教育機関の設立、交通網の拡大普及、大規模展覧会の創設、西欧文化に影響を受けた、型や伝統にとらわれない表現主義等々に起因する新しい潮流は、

都鄙の別なく、この分野の様相を変貌させていった。就中、中央展での成功者とみられるのは、白倉嘉入一人である。渡辺更響も生地を離れ尾竹竹坡に師事、画風に生新な明るさを生んだが、後年は西川に帰郷する。戦時中の制作時代、揮毫でくらしを立てることの困難さは、想像に難くない。ここに挙げた八人全員が日本画家であるが、戦中にかけて南画の凋落には目を覆う。したがって、とくに更響のような専門の日本画家にとって、近代日本での一般世間における活躍は到底望めるものではない。今日、商店のウィンドウや農家の脇床に軸装された小品をみるにつけ、比較的購求しやすいものを多作したのだろう。

伝川も渡辺と同じ尾竹門人だった。岡倉天心と横山大観を主とする日本南画院の創始した朦朧体の表現法を、この伝川および白倉も試みている。流行に鋭敏だったが、師系が両者の行末を左右し、かつ画家の性格も決定的に後年の評価を分けた。

白倉の場合、本人の生地新発田に中央展出品作レベルの大作が収載され、市民に愛好家もいた。筆者はその御長女に画伯のことを数次取材したが、画業にかける厳格な姿勢、制作時はおろか、アトリエには一切入室出来なかったことを子供心によく覚えていと話された。一家全ての生活が、その彩管の穂先にかかっていた。

かたや伝川の方は、実の子どもですら親の没年を知らないといわれた。平成二十九年秋の四回目の文人展に、余り見かけることがないと思われる富士登山図大作軸を町内割烹から借用展示したのだが、巻町から来場された親戚の方が鑑賞してください。話を伺ったところ、上京後は「糸の切れた風」のように音信が全く途絶えてしまったという。現在作成中の『西川郷土史考』には、旧町内親類の営む割烹に伝わった軸を十点収録する予定だが、今日これ以上伝川の遺作を見出すことは、町内でも相当難しい。先の白倉作で保存状態のよいものの多くは額装、伝川作はほぼ全てが軸装。床の間が消え、一般家庭や公共施設、会社の玄関ロビー辺りに飾られる絵画の姿は、殆ど額装である。この一事を指摘してみても、白倉が残り、伝川の画名が煙滅した理由がわかる。町立西川中学校において、地元ライオンズクラブが主宰した伝川の回顧展が昭和五十年代にあったと御息様

より伺ったが、当時の記録は、残念ながらもとめられていなかった。さほど時間が経過していないように感じたのだが、その折の様子を開ける関係者にお会い出来ずにいる。町内割烹「天川屋」御主人様に伺ったところ、伝川の実子二人がここに養子に入っていたが、諸事情で家業を継ぐことはなかった。

まとめてみると、確かに数としては指折りの人数が挙げられる。その多くは町外に出た。よって、元々遺墨の伝来数も少なくなる。身近に作品を感じなくなると、町民にとって書画鑑賞を嗜む習慣が希薄になる。現今の書画離れのくらしぶりの、主因となる事実であろう。これは旧西川町だけの体質ではないと思われる。反面、地域でも零細ながら伝川や熊倉等煙滅文人の逸事を、比較的大規模農家の床の間や襖絵、欄間に掛かる扁額、割烹の調度品を通して拾うことが、今ならば可能であることを実感しつついる。

八、まとめ

史跡及び観光の一面からは、越後善光寺を重視している。毎年八月十六日の一日限り、秘仏の御開帳がある。人々の参拝に混ざり拝殿に上げて頂き、屋内に掲げられるいくつかの額を鑑賞した。御縁起への考察は、これまでも先行文献にみられるが、書画に言及したものはない。筆者の関心事では、隣町赤塚の文人として名の通った中原元議（二七九二―一八七二）の、紙上を走る豪放な筆緻で揮毫した上杉謙信詩作が目止まった。秘仏は戦国時代、遠く離れた縁のない三条市鹿峠（旧下田村）の秀翁寺で発見され、ここに戻されたと伝わる。その地元越佐文人研究会会員の大橋昭五御夫妻に同道して頂き、秀翁寺に参拝が叶い、御住職にお話をうかがえた。先代様まで越後善光寺での御開帳に来寺され、式典に携われたと聞く。元々寺は下田長尾氏の二代目・「景文」が入道して「秀翁」と号したことにちなみ創建。江戸の中期に焼失。のち鹿峠の大庄屋・近藤善内の力で現在地の鹿峠一〇五一番地に移る。浄土宗、本山は知恩院。かつてあった所は「秀翁寺平」と呼ばれる。

典拠の薄い民間伝承は各地に残っているが、改めて調査して現時点で判明し得る記録を後世に残せばよい。秀翁寺隣りの共同墓地に向かうと、中に新保正與の撰書になる墓銘が新たに発見された。何かしら曾根と下田との地縁があり、そうなる気がする。また善光寺境内に建つ「無量寿仏像碑」を建立した上曲の大関氏の邸宅跡を旧月潟村内に訪れてみると、平成の初め頃と付近の状況が大きく異なっていた。墓域は整備され、「大関杞陰碑」も確認出来た。碑面首行「源友恵」と刻まれる人名は、一見して誰のことか識別し難いが、本文中度々登場する小澤精庵の別号である。この特殊な署名に関しては、西川町文化財調査審議委員長田子了祐氏論文「小澤精庵あれこれ」（『西川町を中心とする西蒲原郡ゆかりの文人』所収・H14刊）に触れている。

そもそも市町村史のないことを憂い編集を開始したのだが、『西川町史考』全三十五巻や文中紹介した地元の古老による著述中に、今では拾遺不可能な情報が満載されている。考えようによっては町史が刊行されなかった一因に、充分代わるに余りある記録が既にまとめられていたわけである。県下各地の市町村史も心ある人々によって折々活用され、今日的な新しい目的、求めに応じた利用が行われている。中には記事の書きかえを要する部分が出るのも、自然である。西蒲・曾根郷ゆかりの文人研究会を主とする編集委員会も、かつての古老と称された方々にふさわしい、地元生活のキャリアを有する人々である。その知見を頼りに、従来の著述を再利用しつつ分担執筆を続け、新たな街の気運を盛り込んだ一冊をまとめ上げるつもりである。一般的な市町村史と性格を異にする点として、近世近代から現代までの営みをつなげる媒体として、本稿に筆者が記述したような書画文芸の社会的役割とその評価を、他書より多く録入する。総じて風土を、筆跡と人物史とを共に味わう意図から、かねて当たり前のこととしてあった書画文化と人々の日常の調和の再構築を期したい。

つまりは、地域史料とどう向き合うかである。この歴史的文化財を拠点とするコミュニティ活動を通して、今後地域住民の文化財とその後の保存・活用に対する意識が高まれば幸いである。